

# 朝鮮版『正徳大明会典』の成立とその現存

——朝鮮前期対明外交交渉との関連から——

桑 野 栄 治

## 目 次

- 一 はじめに
- 二 『皇明祖訓』と『正徳大明会典』明祖訓条
- 三 蓬左文庫本『正徳大明会典』の書誌と特性
- 四 朝鮮版『正徳大明会典』の印出について
  - 1 中宗代の場合
  - 2 明宗代の場合
- 五 むすび
- 一 はじめに

朝鮮王朝は武人李成桂と新興の儒者官僚層との結合によって成立した。その統治理念となったのが高麗末期に受容された朱子性理学であり、礼と法の制度整備のためには中国の古制（とくに唐・宋の制度）に加え

て「時王之制」（明の制度）<sup>1</sup>を研究する必要があった。この中国歴代の制度研究に欠かせないのは、いうまでもなく中国の書籍である。

たとえば、礼の場合、『国朝五礼儀』（成宗五年〔一四七四〕）編纂に際して参考とされたのは高麗毅宗代（一一四七～七〇年）制定の『詳定古今礼』である。しかし、太宗代（一一四〇～一八八）における五礼の制度整備過程では、古制としては『通典』に引かれた『大唐開元礼』を、そして「時王之制」としては『洪武礼制』を重視した。<sup>2</sup>法の場合をみても、行政基本法典としての『経国大典』（成宗十六年〔一四八五〕施行）は『経済六典』（太祖六年〔一三九七〕）を踏まえて成立したものではあるが、刑法規範としては『大明律』を準用した。これを朝鮮の実状にかなうよう撰せられた『大明律直解』の頒布は建国もない太祖四年（一三九五）のことである。<sup>3</sup>こうしてみると、新王朝の各種制度整備の過程で中国書籍の輸入とその印刷が活発となるのもうなずけよう。

ところで、朝鮮前期に最大の懸案であった対明外交問題のひとつに宗系弁誣問題がある。この問題は、中宗十三年（一五五八）に朝鮮使節が『大明会典』を明から購入したことによって再燃するが、『大明会典』は朝鮮で印出され、その完本が名古屋市蓬左文庫に現存する。この書の現存は朝鮮の対明外交姿勢と礼学研究、ひいては朝鮮の印刷文化を考えるうえで興味深い素材となる。もちろん、朝鮮の印刷文化と日本現存の各種朝鮮本については、韓国では沈暎俊氏が数冊の研究書を上梓され、日本では藤本幸夫氏が一連の研究成果を公にされている。蓬左文庫架蔵の朝鮮本に関しても、わずかながら個別研究がある。しかしながら、日本現存の朝鮮版『大明会典』、つまり蓬左文庫本『大明会典』についてはこれまで正面から論じられなかったように思う。それにしても、朝鮮政府はなにゆえ『大明会典』を購入し、またいかなる事情のもとにこれを印出したのであろうか。

本稿は、朝鮮版『大明会典』の成立事情について歴代の実録記事を中心に究明し、また、書誌学者による研究蓄積と主要図書館の蔵書目録を活用しつつ、現存本の特性について考察するものである。これにより、十六世紀の朝鮮における対明外交姿勢の一端を明らかにすることが眼目である。

## 二 『皇明祖訓』と『正徳大明会典』『明祖訓条

本稿の伏線には朝鮮前期の対明交渉史がある。そこで、行論の都合上、『大明会典』の性格とその編纂、そして朝鮮との関わりを整理しておきたい。

明代の主要な法典には『大明令』（洪武元年（一三六八））『大明律』（洪武三十年）などがあるが、『大明会典』は『諸司職掌』を基礎に『皇明祖訓』『御製大誥』『大明令』『大明律』など十二書を引用する総合行政法典である。このうち、『皇明祖訓』は明創業の君主たる太祖洪武帝の朱氏一門に対する家訓書といってもよい。洪武帝は諸王の官職・制度や服務の規律を定めた諸規定集『祖訓録』をまず制定し（洪武六年）、のちにこれを重定した『皇明祖訓』（洪武二十八年）を諸王に賜って厳守させた。その主眼は中央集権的な君主専制の確立にある。洪武帝が巻頭の序のなかに、祖訓を一字たりとも改易してはならぬと厳に言い渡したことはよく知られている。では、明・朝鮮間の紛争の原因となった条文を次に掲げよう。

一、四方諸夷、皆限山隔海、僻在一隅、得其地不足供給、得其民不足以使令、（中略）今将不征諸夷国名開列於後、東北、朝鮮国（即高麗、其李仁人及子李成桂今名旦者、自洪武六年至洪武二十八年、首尾凡弑王氏四王、姑待之）（『皇明祖訓』祖訓首章）（一）内は割註、以下同じ）

右の条文は、洪武帝が対外的な軍事外交方針（いわゆる「不征之国」）を述べた箇所であり、以下、日本国・大琉球国・小琉球国など十五国がこれにつづく。問題となったのは「朝鮮国」以下にある三十九文字の割註である。そこには李成桂が李仁任の子であり、洪武六年（恭愍王二十二年（一三三七））より洪武二十八年（太祖四）にかけてこの二人が高麗王氏四王を弑した、と刻まれる。この事実太宗二年正月に朝鮮側の知るところとなり、翌年十一月に朝鮮使節に託してこれを弁明させた。

A 遣司平左使李彬・驪原君閔無恤如京師謝恩、兼進宗系并明奏本也、奏曰、洪武三十五年（太宗二年、筆者註）正月初八日、陪臣趙溫回自京師、説称、祖訓条章内云、臣〔芳遠〕宗系、是李仁任之後、聽此不勝兢隕、（中略）伏望聖慈垂察、令臣宗系得蒙改録、一国幸甚、謹具奏請聞、（『太宗実録』卷六、三年十一月己丑〔十五日〕条）

右の奏本をもつて赴京した李彬らは改正を約した礼部の咨文を得て帰国し、いったん解決した。<sup>13</sup>ところが、さきの『皇明祖訓』内の条文は『大明会典』に引用され、その『大明会典』を朝鮮使節が購入したことによって明・朝鮮間の一大紛争となる（後掲史料B）。わずか三十九文字の割註とはいえ、朝鮮王室としては容認できる内容ではなかったに相違ない。

その『大明会典』はおおよそ三回の纂修を経ている。まず、一五〇二年（弘治十五、燕山君八）に徐溥らが孝宗弘治帝の勅を奉じて纂修し、「弘治会典」が完成する。しかし、弘治帝崩御（一五〇五年正月）のため頒布されず、一五〇九年（正徳四、中宗四）に楊廷和らが誤脱を参校補正して頒布された。これが本稿で取り扱う『正徳大明会典』一八〇巻である。中宗十三年に朝鮮が購入した『大明会典』はこの『正徳大明会典』であり、当時の実録記事には次の如くある。

B 政院啓曰、今正朝使新買來大明会典内、我國世系外謬、亦有我祖宗所不為之事、臣等見之、甚為驚駭、此冊非民間私撰、始面有皇帝御製序、乃朝廷共議所撰者也、今日齋戒之日也、啓之亦難、然事甚非輕、故不得已啓之、広議処置何如（『大明会典』、以我太祖乃李仁任之後、弒王氏四王而立云）、伝曰、予曾見此冊矣、巻帙甚繁、未及見

此事、今見之、至甚驚愕、其召大臣議之、（中略）伝曰、祖宗豈為如此事、宜亟請改、（『中宗実録』卷三二、十三年四月甲午〔二十六日〕条）

これが朝鮮中宗代における宗系并誣問題の再燃である。<sup>14</sup>民間の私撰であればともかく、御製序に始まる勅撰であったから、事は重大であった。全一八〇巻からなる膨大な法典のゆえに、朝鮮国王中宗は当初、この割註に気づかなかつたという。実際に、『正徳大明会典』には「今将不征諸夷国名開列於後／東北」との記録につづけて、

C 朝鮮国（即高麗、其李仁人及子李成桂今名旦者、自洪武六年至洪武二十八年、首尾凡弒王氏四王、姑待之）（同書卷九六、礼部五五、朝貢一、明祖訓条）

とある。<sup>15</sup>中宗はまもなく、宗系并誣奏請使として南賓を赴京させた。<sup>16</sup>以後、朝鮮国王は明皇帝へ宗系改正を要請すべく、定期的に明へ派遣される各種使節にその任務を託すこともあった。

ついで一五二九年（嘉靖八、中宗二十四）に世宗嘉靖帝は内閣に勅諭して弘治十六年以降の事例を『正徳大明会典』に編入せしめた。これにより、一五四九年（嘉靖二十八、明宗四）に「嘉靖統修会典」五三巻が完成するが、秘府（宮中史庫）に蔵して頒布されてはいない。ただし、後述する如く、のち明宗七年（一五五二）にその写本一冊が朝鮮にもたらされた点に注意を喚起しておきたい。

そして一五七六年（萬曆四、宣祖九）六月、神宗萬曆帝は内閣に勅諭して嘉靖二十八年以降の事例を加えて纂修せしめ、一五八七年（萬曆十五、宣祖二十）二月、『萬曆重修会典』二二三巻が完成、頒布に至る。

朝鮮へは宣祖二十一年にまず一冊が謝恩使兪泓によつてもたらされ、翌宣祖二十二年にその全巻が朝鮮国王に頒賜された。明・朝鮮の実録記事には次の如くある。

須給朝鮮国王李昖会典全書、從其請也、(『明神宗実録』萬曆十七年九月乙巳〔一日〕条)

聖節使尹根寿、齋大明会典全書及皇勅以来、上祇迎于弘化門外、御明政殿、受賀、赦雜犯死罪以下、尹根寿超資、前後奉使人有功者、磨練錄勲事、伝教、以黃廷彥・兪泓・尹根寿為首功、(『宣祖実録』卷二三、二十二年十一月丙寅〔二十二日〕条)

『萬曆重修会典』全巻と改正の勅書は聖節使尹根寿に託され、のち尹根寿はさきの兪泓とともに光国功臣一等となる。<sup>(18)</sup>これが朝鮮宣祖代における宗系弁誣問題の解決である。改正された『萬曆重修会典』を次にみてみよう。<sup>(19)</sup>

D 祖訓、朝鮮国即高麗、其李仁人及子李成桂今名旦者、自洪武六年至洪武二十八年、首尾凡弒王氏四王、姑待之、(中略) 先是永樂元年、其国王具奏世系不係李仁人之後、以弁明祖訓所載弒逆事、詔許改正、正徳・嘉靖中、屢以為請、皆賜勅獎諭焉、萬曆三年、使臣復申前請、詔付史館編輯、今録于後、李成桂系出本国全州、(後略) (同書卷一〇五、礼部六三、朝貢一、朝鮮国条)

すでに末松保和氏によつて指摘された如く、ここには朝鮮側から明側への改正要請の次第と李成桂の宗系が追録されたにすぎず、問題となつた『皇明祖訓』内の条文は一字たりとも修正されていない。<sup>(20)</sup>『皇明祖訓』内の条文は『正徳大明会典』に引用され(史料C)、「嘉靖続修会典」を

経て『萬曆重修会典』もまたこれを引用したのである(史料D)。にもかかわらず、中宗・明宗代(一五〇六・六七)年には『正徳大明会典』の印出をめぐる論議が数件確認され、その完本一八〇巻が名古屋市蓬左文庫に架蔵されている。のみならず、蓬左文庫本は『萬曆重修会典』の成立以前、つまり宣祖二十二年に宗系弁誣問題が解決する以前に朝鮮で印出されたものである。

では、その印出の際、明・朝鮮間で問題となった『正徳大明会典』巻九六の明祖訓条(史料C)について、朝鮮側はいかに対処したのであるうか。この疑問を解き明かすための基礎作業として、まずは日本に現存する『正徳大明会典』の書誌を整理し、その特性を明らかにするのが捷徑であろう。

### 三 蓬左文庫本『正徳大明会典』の

#### 書誌と特性

『正徳大明会典』の版本は日本ではすでに四、五種の存在が知られている。たとえば、山根幸夫氏は『正徳大明会典』の影印に際して東京大学附属図書館本、内閣文庫本、尊経閣文庫本、静嘉堂文庫本、東京大学東洋文化研究所本(旧東方文化学院蔵本と大本文庫本二本の計三本)の七本と蓬左文庫本の計八本を調査され、三系統五種以上の版本が日本に現存することを明らかにされた。<sup>(21)</sup>

#### I a 東京大学附属図書館本・大形本

b 静嘉堂文庫本、東京大学東洋文化研究所本(旧東方文化学院蔵本)・中形本



c 尊経閣文庫本、東京大学東洋文化研究所本（大本文庫本）…  
小形本

## II 内閣文庫本

### III 蓬左文庫本（I、III、a、cの符号は筆者）

まず、系統Iが御製序七行・本文十行詰めであるのに対し、系統IIは本文十一行詰めという異なる版式をとる。そして、系統IIIは御製序一〇行・本文十二行詰めの大形本であり、朝鮮本である。系統Iのa、cは、外寸と匡郭の大きさを基準に分類したものである。このうち、系統Iに属する大形本のaが落丁も錯簡もない完本で摺り付けも綺麗であり、初刊本に近いとの推測から影印に付された。ところが、系統IIIの朝鮮版『正徳大明会典』、つまり蓬左文庫本『正徳大明会典』に関する既往の調査報告をみると、いまなお不明な点が少なくない。とくに、明版との差異ないし特性については意外と知られていない。そこで、ここでは蓬左文庫本の書誌について整理・検討してみたい。

蓬左文庫本『正徳大明会典』について、『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』史部、十三、政書類には、

E 大明会典一百八十卷、序目一卷、三十五冊、明・李東陽等奉勅撰、朝鮮古活字印版、黒口十二行本、明嘉靖三十一年官賜、有御本印記、駿河御讓本

とある。<sup>22</sup>末尾に「駿河御讓本」とみえる如く、元和二年（一六一六）十月に徳川家康の遺言によって尾張初代藩主徳川義直のもとに贈られた、家康の旧蔵書である。<sup>23</sup>分譲当時の駿河御讓本のリストとして、元和三年正月七日付けの「御書籍之目録」（請取書の写し）があり、その「六番」

に「大明会典 三十五冊」と記されている。<sup>24</sup>義直の蔵書印である「御本」の印記があるものの、好字の義直がのちに蒐集した書籍ではない。しかし、右の書誌Eは目録という性格上、その情報量には限界がある。装幀・匡郭の大きさに関するデータはなく、毎行字数もまた不明である。この蓬左文庫本『正徳大明会典』の印記と内賜記に着目しつつ、書誌をとったのが中村榮孝氏である。<sup>25</sup>

大明会典 明東陽等奉勅撰 一八〇卷 三十五冊

一五五二年（明宗七、嘉靖三一）刊。前工曹參議南応竜（一五三四年の進士及第）の内賜本。活字版 — 癸丑字か。第二七冊は印記なく、第四冊には「晦斎」、「坡平後人」、「尹漑汝沃」の印、他はすべて「挽（？）東」、「咸山世家」の二印、尹漑（二四九四～一五六六）は、京畿道坡平の人、汝沃は字、晦斎は号。

右に掲げた中村氏の解説はすでに韓国の書誌学界でも紹介されたところであり、第四冊にある印記から、明宗代（一五四五～六七七年）の左議政尹漑が原所蔵者であったことを明らかにされた。そしてこの蓬左文庫本は内賜本である。周知の如く、官版は実録など特殊なものを除いて、その大部分は官僚に下賜されたが、<sup>26</sup>受賜者が製本に留意せず破損するなど保管保存の状態が問題となり、世宗二十二年（一四四〇）八月に次の如き規制が加わった。

F 伝旨承政院、鑄字所模印書籍、頒賜各品、其受賜者、不用心粧幀、以致損毀、自今、令限以三月粧幀 呈本院、受宣賜之記、永以為式、  
〔世宗実録〕卷九〇、二十二年八月己卯（十日）条

すなわち、官版の書籍を賜った官僚は頒賜から三ヶ月以内に製本し、

これを承政院に提出して「宣賜之記」を受けさせるよう規定したのである。「永く以て式と為す」との記録からみて、以後、慣例化されたであろう。

そこで蓬左文庫本『正徳大明会典』をみると、巻首の表紙見返しには内賜記があり、かつ開巻初頭には「宣賜之記」の印記がある。これらは印出の時期を推定する際に重要な手がかりとなる。その内賜記には、

G 嘉靖三十一年六月 日／内賜前工曹参議南應龍／大明会典一件／命除謝／恩／右承旨臣洪（手決）

とある。この受賜者「前工曹参議南應龍」と出納者「右承旨臣洪」について追究すれば、まず、南應龍（一五一四～五五年）<sup>28</sup>が工曹参議を拝したのは明宗七年（嘉靖三十一）五月十七日である。南應龍には兄應雲（一五〇九～八七年）<sup>29</sup>がおり、中宗三十年（一五三五）に兄弟揃って文科丙科に及第する。内賜記に「前工曹参議」とあるのは、明宗七年六月十二日に父の戸曹参判南世健が死去しており、服喪のため南應龍が工曹参議を辞したからであろう。<sup>31</sup>次に、出納者の「右承旨臣洪」であるが、『明宗実録』を徴すれば、明宗七年六月当時、承政院右承旨にあったのは洪曇（一五〇九～七六年）<sup>32</sup>である。洪曇は中宗三十四年に文科丙科に及第し、明宗六年九月十二日に右承旨を拝したのち、翌七年六月二十二日には左承旨に陞進した。<sup>33</sup>したがって、蓬左文庫本『正徳大明会典』の内賜記は、南世健が死去した明宗七年六月十二日以後、洪曇が左承旨に陞進した六月二十二日以前の、この十日のあいだに洪曇によって記され、<sup>34</sup>そして「宣賜之記」を受けたと判断してよい。

これまで、実録中の人事記録をもとに蓬左文庫本の受賜者と出納者に

ついて掘り下げてみたが、それでも蓬左文庫の書誌Eと中村氏の調査報告では、版本の大きさ、匡郭、版心、表紙についていくつかの疑問が残る。しかし、これらの疑問は沈暁俊氏による詳細な調査研究によって解消された。いま、沈氏の報告から必要事項のみを摘記すれば、次の如く<sup>35</sup>なる。

日大明会典、一八〇卷、三五冊、李東陽（明）等奉勅撰、丙子字混有補字本、明宗七（一五五二）年内賜本、三四・一×二一・二cm、四周単辺、有界、匡郭二五・四×一七・一cm、十二行二十二字、註双行、版心…上下黒口、上下内向二葉花紋魚尾、装幀…雷紋繫地唐草模様濃茶色表紙、紙質…楮紙

さきにみた系統Iのうち、東京大学附属図書館本の外寸は三三・四×一九・四cm、匡郭は二五・七×一七・二cmであるから、<sup>36</sup>明版の東京大学附属図書館本と朝鮮版の蓬左文庫本はほぼ同一の大形本である。

さて、中村氏は蓬左文庫本の内賜記を拠り所に蓬左文庫本の刊年を「二五五二年（明宗七、嘉靖三二）刊」と判断された。これに対し、山根氏は「本書は嘉靖三〇年頃に李朝政府の手によって刊刻されたものではあるまいか」とやや幅をもたせて推定する。<sup>37</sup>ところが、沈氏は「朝鮮朝ではこれを中宗十三（一五一八）年四月二十六日甲午に購入したが、いつ重刊したかは明らかでない」と明言を避けた。<sup>38</sup>たしかに朝鮮は中宗十三年四月に『正徳大明会典』を購入しており、これにより明・朝鮮間で宗系弁証問題が再燃する（史料B）。もちろん、内賜が印出後かなり遅く行われ、また通常の内賜を一通り終えたのちに特定の人物に臨時になされる可能性について<sup>39</sup>も念頭に置くべきであろう。

では、朝鮮版『正徳大明会典』の刊年について、韓国の書誌学界では意見の一致をみていないのだろうか。そこで、韓国精神文化研究院での最初の書誌事業として学界に提供された、鄭亨愚・尹炳泰編『韓国冊板目録総覧』の報告を次に掲げよう。<sup>(10)</sup>

大明会典 \*内賜記「嘉靖三十一年六月 日。内賜……」

ここでは『正徳大明会典』の所在とその外形的特徴などには一切触れていない。内賜記の一部が記されるのみで、受賜者と出納者に関する記述を欠く。「嘉靖三十一年六月」の内賜記を記載したところからみて、おそらく蓬左文庫本を指すのではあるまいか。<sup>(11)</sup> というのも、すでに大韓民国国会図書館司書局参考書誌課編『韓国古書総合目録』には、

大明会典 明、東陽等奉勅撰、明宗七年（一五五二）、活字本（癸丑字？）、一八〇卷三五冊、<sup>(12)</sup> 日蓬左、武屹（二七冊）

とあり、『正徳大明会典』の現存本として蓬左文庫本三十五冊を筆頭に掲げ、ついで武屹書齋本二七冊の計二本を記す。<sup>(12)</sup> なるほど、慶尚北道星州郡修倫面に所在する檜淵書院（主享者鄭述、仁祖五年（一六二七）創建、肅宗十六年（一六九〇）賜額）は朝鮮版を架蔵するという。

I大明会典 徐溥（明）等受命編、古活字本（丙子字）、〔中宗〕明宗年間、一二冊（零本）、黒口、上下内向二葉花紋魚尾、四周単辺、有界、十二行二十二字、半郭一七・四×二五・四

右の書誌Iは、大院君執権当時に撤廃を免れた四七ヶ所の書院のうち、韓国に現存する三三ヶ所の書院を主要対象とし、架蔵本のうちでも漢籍のみを収録した調査報告からの引用である。<sup>(13)</sup> 鄭述（一五四三―一六二〇年）個人の書齋であった武屹書齋（武屹精舎）の架蔵本は檜淵書院に移

管され、壬辰倭乱以前の鑄字本四九二冊が保存されているという。<sup>(14)</sup> みにみた沈氏による書誌Hと比較すれば、「四周単辺」「有界」「十二行二十二字」は共通しており、匡郭の大きさ、版心の黒口と魚尾の形態からみて、同版の朝鮮版『正徳大明会典』ではなからうかと推測される。そして、右の書誌Iでは檜淵書院本の刊年を「中宗」明宗年間」とゆるやかに判断したところに目がとまる。

というのも、韓国ではこのほか同版と思われる朝鮮版が数本現存するが、その刊年については必ずしも一致していない。たとえば、誠庵文庫本（零本一冊）、高麗大学校中央図書館本（零本一冊および四冊）の計三本は「明宗七年」となっている。一方、大韓民国国立中央図書館本は次の如く、「中宗年間」と推定されている。<sup>(15)</sup>

I大明会典 卷七六、（明）東陽等奉勅撰、丙子字本、〔中宗年間〕、六〇張、四周単辺、半匡二六×一七cm、十二行二十二字、註双行、内向二葉花紋魚尾、三一・七×二〇・五cm

右の書誌Jによれば、国立中央図書館本は卷七六のみの零本である。ただし、この刊年を「中宗年間」と推定した根拠は不明である。丙子字の鑄造が中宗十一年であったからであろうか。<sup>(17)</sup> あるいは、中宗年間の実録記事に依拠した結果であろうかとも推測される。しかし、その旨の記載はない。

主要図書館の蔵書目録をみる限り、明宗七年六月の内賜記を有する朝鮮版『正徳大明会典』は蓬左文庫本が唯一である。<sup>(18)</sup> にもかかわらず、韓国の書誌学界では中宗年間に印出された可能性を残している（書誌I J）。その内賜記がただちに刊年を意味するわけではないとの判断であ

ろうか。朝鮮版の刊年が『正徳大明会典』購入の中宗十三年四月（史料B）以降、明宗七年六月（史料G）以前であることは疑いないが、いまま少し絞り込むことはできないものであろうか。そのためには、王朝政府による『正徳大明会典』印出の事情とその背景について、実録記事を中心に追究することが不可欠であろう。

なお、蓬左文庫本の刊年を推定する際、これを解く鍵となるのが唯一の完本である同本の特性である。蓬左文庫本『正徳大明会典』巻九六、礼部五五、朝貢一、皇明祖訓条はいわゆる「不征之国」を列記するが、明・朝鮮間で問題となった「朝鮮国」以下の註記の箇所には活字が組まれている（図版参照）。明版の割註の字数は三十九文字である（史料C）から、十二行二十二字で註双行の朝鮮版の場合、「朝鮮国」以下に活字を組むと二行にわたることになる。しかし、蓬左文庫本の当該箇所は「朝鮮国」の一行のみである。ソウル大学校附属図書館架蔵の明版『正徳大明会典』では、宗系弁証に関わるこの箇所が切り取られている<sup>19</sup>というが、朝鮮版『正徳大明会典』は活字を組むことなく印出したものである。この特性が朝鮮版たるの所以である。

#### 四 朝鮮版『正徳大明会典』の印出について

##### 1 中宗代の場合

十五世紀には儒教理念に立脚した王朝国家建設を志向する過程で、ついで十六世紀には統治規範のあらゆる秩序の瓦解を克服するために、王朝政府は積極的に中国書籍を輸入し、また印出した<sup>20</sup>。輸入方法としては、代価を支払って購入する形式と、明皇帝から頒賜を受ける形式があった

<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>		<p>供給得其民不足以使令若其自不揣量來擾我邊</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>		<p>祥也吾恐後世子孫倚中國富疆貪一時戰功無故</p>		<p>則彼為不祥彼既不為中國患而我興兵輕伐亦不</p>	
東北		朝鮮國		正東偏北		日本國		正南偏東		大琉球國	
		<p>今將不征諸夷國名開列于後</p>		<p>密邇累世戰爭必選將練兵時謹備之</p>		<p>興兵致傷人命切記不可但胡戎與西北邊境互相</p>					

が、いずれの場合も頻繁に往来する各種使節にその任務を託すことが多かった。<sup>33)</sup>とりわけ、中宗代（一五〇六―四四年）には赴京した使臣が活版に明の書籍を購入している。というのも、成均館内に設けた尊経閣が中宗九年（一五一四）十二月に火災に見舞われ、その蔵書の補填を急いでいたからである。尊経閣失火の翌朝の記録を次に掲げよう。

御朝講、司諫李彦浩曰、去夜、尊経閣失火、祖宗朝書冊盡焼無遺、掌務官及上直官員請並推問、上曰、尊経閣失火、至為驚駭、官員推問為當、（後略）（『中宗実録』卷二一、九年十二月辛卯〔三日〕条）

周知の如く、校書館の蔵書閣（書庫）として機能した隆文楼・隆武楼（文武楼）、弘文館の登瀛閣、成均館の尊経閣が王朝政府の三大書庫である。<sup>32)</sup>このうち、成均館の尊経閣は儒教經典を収蔵する書庫であり、すでに成宗六年（一四七五）の時点でその収蔵書数は本館とあわせて「無慮数万卷」であったという。<sup>33)</sup>尊経閣の焼失が儒教を統治理念とする王朝政府に相当の打撃を与えたであろうことは想像に難くない。その数日後、左議政鄭光弼・右議政金應箕らは四書五経・通鑑・性理大全の印出とともに明からの書籍購入を議啓し、中宗の裁可を得ている。<sup>34)</sup>さらに翌中宗十年十一月に弘文館副提学金謹思らがかつての世宗代の如き印刷文化の復興を建議した。<sup>35)</sup>当時は校書館の紀綱紊乱も相俟って銅活字が流出し、木活字による補充が顕著となったからである。<sup>36)</sup>これに対して中宗はさまざまの如き伝旨を下した。

下伝旨于礼曹曰、（中略）又下旨曰、大抵書冊務要精緻、不當龐惡、我世宗朝、印出書籍、非但紙品甚佳、打印亦極其精、近古書冊之美、無踰於此、其後浸不如古、校書失職、近来尤甚、紙滯墨澆、校讎亦

慢、以致書籍拙惡、予窃痛恨、其令別設都監、量帑勤儉人為堂上官、弘文館所藏朱文公集・真西山讀書記・朱子語類・資治通鑑胡三省註・歐陽文忠公集・三國誌・南北史・國語・梁書・隋書・五代史・遼史・金史・元史・戰国策・伊洛淵源録及私藏二程全書等冊、監掌印出、而八道中、鉅道則卷秩多數書籍、小道則卷秩不多書籍、分定開刊、節目及都監名号并磨練、資治通鑑唐本字樣、細大適中、以此改鑄銅字、且甲辰・甲寅等字訛剋者、悉令改鑄、（『中宗実録』卷二三、十年十一月丙戌〔四日〕条）

これによると、中宗は銅活字（のちの丙子字）を鑄造する都監（いわゆる鑄字都監）の設置とあわせて、明への各種使節に広く書籍を購入するように命じている。丙子字新鑄の意図は、世宗代に隆盛をきわめた印刷文化の復興にある。紙質の低下、活字の摩滅に加えて校書館の機能低下が指摘されており、金謹思の上奏をうけた中宗の対応であったとみてよい。また、右の記録からは、当時の弘文館における中国書籍の架蔵状況にある程度知らしめる。弘文館架蔵の『朱文公集』以下十六種と私家蔵の『二程全書』を印出するよう朝鮮八道に命じているが、『大明会典』の書名はない。すでにみた如く、『正徳大明会典』の成立は中宗四年にあたるが、いまだ朝鮮へは輸入されていなかったようである。

こうした王朝政府による蔵書補填政策が地方社会を巻き込みつつ推進されるなかで、中宗十三年（一五一八）四月に『正徳大明会典』が正朝使によって朝鮮へもたらされた（史料B）。つまり、宗系弁証問題は中宗代の印刷文化復興期に再燃するのである。そして、その『正徳大明会典』の印出は同年十一月に朝議にのぼった。『正徳大明会典』の購入か

ら七ヶ月後のことである。

K政院啓曰、大明会典有国家所當諱之文、以私意削去為難、今印出不可承誤、後於赴京行次貿一本置礼曹、相考古事何如、伝曰、所啓當矣、今方奏請改正、而印其書則是以其書為信而頒行也、又不可私改其文、令赴京人貿一件置礼曹當矣、(『中宗実録』卷三四、十三年十一月庚申〔二十四日〕条)

右の史料Kによれば、問題となった条文を私意に削除すべきではない、と承政院は上啓している。というのも、王朝政府は第一次宗系弁誣奏請使として南袞らを派遣したばかりであり、いまだ明皇帝の改正の勅書を得ないまま『正徳大明会典』を印出頒行すれば、その誤りを朝鮮側が認めたことになる。中宗は承政院の啓にしたがい、明より『正徳大明会典』一本を購入し、これを礼曹で保管するよう命じた。この記録からみて、中宗十三年の時点では『正徳大明会典』の印出は中止されたものと判断してまちがいない。

同じく中宗代にはもう一件、『正徳大明会典』の印出をめぐる論議が実録記事に残る。中宗三十一年五月のことであるが、当時は人心風俗の悪化が問題となり、風紀の一新をはかるべく撰集庁が設置された。<sup>38</sup>撰集庁とは、王朝国家にとって重要な書籍を刊行すべきときに臨時に設置された官庁である。<sup>39</sup>社会綱紀がゆるむなか、前後の受教の矛盾から法令の適用に問題が生じ、そのため中宗は教化教育のためのテキストを頒布させるほか、受教の編纂をも撰集庁に命じている。成宗代に一段落した制度整備はここにきて揺らぎはじめた。中宗三十一年五月の論議はこうした時代相を反映したものとみてよい。

(前略) (領議政金) 謹思曰、臣觀大明会典、臨時取法之事多在焉、今時抄出而用之、似當矣、(中略) 上曰、会典乃是中國之法、與我國不同、故常不用之、其中如有可用者、則與朝廷共議、抄印可也、(後略)

(前略) 伝曰、朝経筵、領相所啓、大明会典可用之法多在、如捕盜論賞與否等条、皆切於用云、抄印事議于政府、而令撰集庁印出及該曹印出事、并議可也、(後略)

(いずれも『中宗実録』卷八一、三十一年五月己巳〔十五日〕条)

そもそも朝鮮と明とでは国情が異なるため、印出するのであれば『正徳大明会典』全卷ではなく、必要な箇所のみを抄撰すればよい、というのが中宗の考えであった。さきの史料Kとあわせて考えるなら、『正徳大明会典』全卷の印出が中宗三十一年以前に実現したとは考えがたい。中宗の伝旨をうけて、この日の『正徳大明会典』の印出をめぐる論議はさらにつづく。

①領議政金謹思議曰、大明会典便於時用、可行条件、撰定刊行事、臣於今朝面啓、右典該六曹之事、無所不備、若撰定則依撰集例、別定六曹堂上各一員會議、令大提学總裁撰集為當、②左議政金安老議曰、大明会典時王之制、摠古准今折衷詳略、以一代之典、行之甚為便當、頃年、世子嘉礼時、臣為礼官、領議政南袞建曰、会典内、皇太子嘉礼、簡而得中、請倣而用之、其時考我國五礼儀註、則非徒煩簡不同、其節目大相牴牾、參酌兩礼、別成儀註而用之、今若抄会典、則儀礼制度與大典・五礼儀註、不同者頗多、必須会通三書、勒成一典、然後庶無矛盾難行之患、此乃國家閑暇、興礼改制之事、恐難於

容易也、若其一二可行之条、則不必別置撰局、今方撰集勸戒之書、並令抄出爲當、③右議政尹殷輔議曰、謹按大明会典、如制度文爲凡于設施、無不該載、我國應行条件、必多有之、但事有宜於古而不宜於今、便於中国而不便於我國、似不必一依華制、然爲勸戒之書、只令設庁撰集、如經国大典及統録・五礼儀註等項、一應常用之典、参互考閱、若可行之条、有所闕漏、則隨宜添補似當、(『中宗実録』卷八一、三十一年五月己巳〔十五日〕条) (番号①②③は筆者)

まず、①領議政金謹思は、『正徳大明会典』を刊行するのであれば、撰集庁の例によって別に六曹の堂上官各一名を選出して會議し、大提學にその撰集を總裁させるのがよい、という。『正徳大明会典』抄出の最初の提案者であるだけに積極的であり、具体的な組織作りまで提示する。次に②左議政金安老は、『正徳大明会典』は「時王之制」であることを強調する。かつて金安老が礼官であったころ、当時の領議政南袞が建議して、王世子の冠礼を『正徳大明会典』に規定された皇太子の嘉礼に則って執り行うよう要請した。簡潔にして要領を得た規定であったからである。そのとき、『国朝五礼儀』内の当該儀註を参考したところ、煩雜・簡略といった問題以前に儀註の細目が一致しておらず、そのため『正徳大明会典』と『国朝五礼儀』の二書を参酌し、別途に儀註を定めて行礼した<sup>(60)</sup>という。こうした経験を踏まえ、もし『正徳大明会典』を抄出するのであれば、その儀礼制度が『經国大典』『国朝五礼儀』と一致しない箇所が頗る多いため、これら三書を総合整理して一典をなす必要があり、そうすれば今後は矛盾なく行礼できるであろう。礼制改革は容易なことではないが、これこそ国家安泰の道であるとして、『正徳大明

会典』の抄出を勧めている。ただし、別途に撰局(撰集庁)を設置せずに、人心風俗教化のための諸書とあわせて印出すればよい、との条件付きで賛成する。そして③右議政尹殷輔は、『正徳大明会典』が諸般の制度を網羅した綜合法典であることを認めつつも、明と朝鮮では国情が相違することから、必ずしも明制を遵用する必要はないという。ただし、『經国大典』『大典統録』と『国朝五礼儀』の諸規定に関しては相互に考閲し、もし遺漏があれば『正徳大明会典』を参考に適宜添補すべきである、<sup>(62)</sup>という。右の『中宗実録』の記事から、『国朝五礼儀』成立後、礼制運営面においては矛盾が生じはじめたことを示唆する。

ここでの論議の焦点となったのは朝鮮の礼と法、つまり『国朝五礼儀』と『經国大典』の運用をめぐるであった。礼の場合、『国朝五礼儀』の改訂はすでに成宗十四年(一四八三)十二月に取り沙汰されている。<sup>(63)</sup>朝鮮は中国の各種制度を摂取したが、習俗の相違から五礼の運用に支障が生じていたからである。しかも、『国朝五礼儀』改訂の發議者は成宗自身であった。法の場合、周知の如く、『經国大典』施行後にも『大典統録』『大典後統録』が相次いで編纂される。これらの事実を、『經国大典』にせよ『国朝五礼儀』にせよ、そのときどきの時代に即した完璧な制度規定はありえないことを示唆していよう。礼書としての『国朝五礼儀』が中宗七年閏五月に校書館より中外に多数頒布されたのは、王朝国家も士庶人も日々大なり小なり儀礼を用いており、『国朝五礼儀』はその儀礼内容を網羅するからであった。<sup>(64)</sup>そしてすでにみた如く、礼の運用をめぐる参考とされたのが『正徳大明会典』である。成宗代のいわゆる大典体制の完成後も、王朝政府はより洗練された礼と法の確立を志向

したのである。朝鮮における『正徳大明会典』印出の意図はここにある。ただし、その後の『中宗実録』には『正徳大明会典』の印出に関する記録がみあたらず、金謹思らが提案した『正徳大明会典』の抄出が実現したかどうかは判然としない。<sup>(65)</sup> もちろん、全巻の印出はここでは議論されていない。中国書籍の購入とその印出については、以後、大提学金安国が積極的に中宗に働きかけたことを伝えている。<sup>(66)</sup>

一方、朝鮮王室の宗系改正をめぐる対明交渉はその後、転機を迎える。中宗三十五年正月に奏請使権機が宗系改正の勅書を獲得したからである。

奏請使〔権機〕状啓曰、(中略) 勅曰、皇帝勅諭朝鮮国王姓諱、爾国数以宗系明非李仁人之後来奏、我成祖(永楽帝、筆者註) 及武宗(正徳帝、筆者註) 朝、具有明旨、朕亦具悉矣、但我高皇帝祖訓、萬世不刊、会典所載、他日統纂、宜詳録爾詞、爾恪共藩職、朕方嘉爾忠孝、可無遺慮也、其欽承之、故諭、(『中宗実録』卷九二、三十五年正月戊戌〔五日〕条)

『皇明祖訓』は万世不刊の書につき、『正徳大明会典』続修の際に朝鮮側の奏請内容を詳録するとの勅書である。<sup>(67)</sup> 中宗は同年二月九日に慕華館で迎勅し、権機以下を加資したうえ、田地・奴婢を給賜した。<sup>(68)</sup> 同年二月十五日には世子に命じて宗系改正を宗廟に告祭し、<sup>(69)</sup> 十月には宗系改正を慶賀して別試を施行したほどである。<sup>(70)</sup> 嘉靖帝の勅書に対して、中宗がいかに歓喜したかが窺えよう。ところが、『正徳大明会典』の続修事業それ自体は進んでいなかった。すでに中宗三十四年十月に帰国した聖節使鄭世虎は「大明会典、多事を以て之を停む」と報告しており、<sup>(71)</sup> 奏請使

権機の明滞在中にも礼部はその遅延を伝えていたのである。<sup>(72)</sup> 結局、中宗は『正徳大明会典』の続修版をみることなく一五四四年に死去した。

## 2 明宗代の場合

中宗の死後、王位を継いだ仁宗はその翌年に病に倒れ、第十三代朝鮮国王として即位したのが明宗(在位一五四五～六七七)である。

明宗代初期の印刷文化事業として、まず第一に特筆すべきは『統武定宝鑑』の印出頒布(明宗三年十月)であろう。<sup>(73)</sup> 明宗即位年八月に明宗の外戚尹元衡一派が仁宗の外戚尹任一派を倒した事件(乙巳士禍)の後、尹任一派の罪状を公開することにその編纂目的があった。<sup>(74)</sup> かつて宗系改正の勅書を得た権機はこの事件に巻き込まれ、両司の啓によって官職を剥奪されたばかりでなく、尹任一派を肅清した良才駅壁書事件(明宗二年九月)に連座して流配先の平安道朔州にて没している。<sup>(75)</sup> 第二に、『中宗実録』『仁宗実録』が明宗五年十月に完成し、翌年三月に洗草されたことである。<sup>(76)</sup> 前王の実録の編纂は朝鮮国王の義務であるが、一大政変の清算と両実録の完成をもって、明宗の王権はひとまず安定したとみてよい。

そしてその二ヶ月後、朝鮮では『正徳大明会典』の印出が決定した。明宗六年(一五五一)五月のことである。

し礼曹啓曰、大明会典今方印出、而朝鮮国王之下註有不美之語、請只印朝鮮国王四字、勿印其註、伝曰如啓、(『明宗実録』卷一一、六年五月辛亥〔二十四日〕条)

すなわち、朝鮮側では「朝鮮国」以下の註記(史料C)を削除すると



の条件付きで『正徳大明会典』の印出に踏み切ったのである。かつて中宗十三年十一月に、中宗によって示された『正徳大明会典』の印出に対する見解（史料K）が想起されよう。「朝鮮国」以下の註記をそのまま活字に組んで『正徳大明会典』を印出することは、その註記内容を朝鮮側が認めたことになる。しかも、この「不美之語」は当時の朝鮮国王である明宗と王室のみの問題ではない。朝鮮王朝を開創した太祖李成桂と、朝鮮王朝の成立そのものに関わる問題である。のみならず、歴代の朝鮮国王はこれまで宗系改正を繰り返し要請してきており、明版のまま『正徳大明会典』を印出することは従来の対明外交政策の放棄にもつながる。そのため、『正徳大明会典』の需要はあっても、明版のまま印出することは不可能であった。これが「朝鮮国」以下の註記を削除して印出した朝鮮版『正徳大明会典』の成立事情である。

ただし、宗系改正を要請する奏請使をあらたに明へ派遣すべきか否かが問題として残った。次に掲げる史料は明宗の伝旨である。

伝曰、大明会典宗系改正事、前者、皇帝至下勅書、故日望其改正、而至今無黑白、来二十五日、礼官及大臣詣闕時、同議奏請事、（『明宗実録』卷一一、六年六月己卯（二十二日）条）

この史料にみる如く、中宗三十五年に嘉靖帝の勅書を得て以来、朝鮮側は明へ宗系改正奏請使を派遣してはいない。当時、朝鮮側が『正徳大明会典』の続修版（つまり「嘉靖続修会典」）を確認したわけではないが、すでに権機が宗系改正の勅書を得ており、朝鮮側としては続修版『正徳大明会典』の完成を待つはかなかったのである。そのため、六月二十五日の三公以下の論議により、奏請使派遣の中止が決定した。とり

わけ領議政李彦は、『正徳大明会典』の続修事業が完了していなければその成書があるはずもなく、嘉靖帝の勅書を信頼せずに再度奏請するのは得策ではない、と強硬に反対したのである。<sup>(17)</sup>

ところが、これより二年前の嘉靖二十八年（明宗四、一五四九）、明では「嘉靖続修会典」がすでに完成しており、この事実は明宗七年二月に確認された。冬至使韓崱がその写本一冊を明より購入して帰国するからである。礼曹は「庚子年例」によって宗廟へ告祭するよう上啓したが、明宗は嘉靖帝の勅書がないこと、また「嘉靖続修会典」も成書ではなく私貨により購入した写本であることに難色を示し、三公に史官を派遣して収議を命じている。<sup>(18)</sup> その結果は次の如くであった。

M三公議、韓崱所進大明会典写本、其於宗系惡名弁誣之事、明白簡切、依庚子年例、申告宗廟為當、他日、皇上頒降印本、更行虔告、有何妨乎、伝于政院曰、大臣議如此、宗系改正、実一国莫大之慶、告宗廟可也、（『明宗実録』卷一三、七年二月辛酉（九日）条）

写本とはいえ、「嘉靖続修会典」では朝鮮王室の宗系が明白かつ簡潔に改正されていたため、ついに明宗はこれを「一国莫大之慶」として宗廟告祭を決定したのである。<sup>(19)</sup> 右の史料Mにある「一国莫大之慶」の表現と宗廟告祭という国事行為からみて、宗系弁誣問題が朝鮮にとっていかに深刻な外交交渉であったか、容易に想像できよう。

では、「嘉靖続修会典」は朝鮮王室の宗系をいかに改正したのであるうか。その具体的な内容は次の実録記事から明らかとなる。

N韓崱贈送待外国事例、其事例曰、大明会典朝鮮国（即高麗、其李仁任及其子李太祖旧諱（成桂、筆者註）、今名今諱（旦、筆者註）者、

自洪武六年至洪武二十八年、首尾凡弑王氏四王、姑待之」、朝鮮国、古高麗国、洪武二年、国王遣使奉表賀即位、請封貢方物、五年、令三歲或一歲遣使朝貢、二十五年、更其国号、曰朝鮮、永樂元年、其国王奏并祖訓条章所載弑逆事、詔勅改正、自後每歲聖節・正旦・皇太子千秋節、皆遣使奉表朝貢方物、其余慶慰謝恩等項、皆無常期、若朝廷有大事、則遣使頒詔、其国王請封、則亦遣使行札、嘉靖八年、使者言、其国王不係李仁任之後、詔以所上宗系、開送于史館、今歲時朝貢、視諸国王号為知礼、二十六年、特許其使臣・同書狀官及從人二三名、於皇壇及国子監游觀、本部劄委通事一員隨行、撥館夫防護、以示優異云、(『明宗実録』卷一三、七年正月乙酉〔二日〕条)

やはり、朝鮮王室の宗系に関わる割註の箇所(史料C)は修正されていない。<sup>80)</sup> 右の史料Nにある「永樂元年、其れ国王、祖訓条章に載する所の弑逆の事を奏弁す」とは、太宗三年(一四〇三)の李彬らによる宗系弁誣奏請、すなわち、『皇明祖訓』内の条文改正の要請を指す(史料A)。また、「嘉靖八年、使者言えらく、其れ国王、李仁任の後に係わらずと。詔して上る所の宗系を以て史館に開送せしむ」とは、中宗二十四年(一五二九)の柳溥らによる奏請を指す。<sup>81)</sup> 朝鮮側はこの二件の奏請事項の追録を改正とみなしたのである。ここに掲げた「嘉靖統修会典」の「事例」はその後、明宗十二年十一月に奏請使趙士秀の報告により、まさしく「実録」であったと確認される。<sup>82)</sup> また、この「事例」の内容は『萬曆重修会典』朝鮮国条に継承される(史料D)ことも銘記すべきであらう。のち、開城府留守を拝した韓崱は明宗七年十月に『皇明祖訓』

を明宗に献じ、馬粧一部を下賜された。<sup>83)</sup> だが、このとき明宗が朝鮮王室の宗系に関わるくだんの条文を直接確認したか否か、定かでない。

さて、ここで蓬左文庫本『正徳大明会典』の内賜記(史料G)を振り返ってみたい。そこには、「嘉靖三十一年(明宗七年、筆者註)六月日」とあった。さらに、問題となった皇明祖訓条の「朝鮮国」以下にある註記の箇所には、活字が組まれていない。すでに検討済みではあるが、明宗六年五月に『正徳大明会典』の印出を決定した際、礼曹が朝鮮王室の宗系に関わる割註については活字を組まないよう上啓して、明宗の裁可を得ている(史料I)。蓬左文庫本は、まさしくこの明宗六年五月に印出が決定した『正徳大明会典』の現存本とみてまちがいない。

したがって、朝鮮版『正徳大明会典』の成立は少なくとも明宗六年五月以後でなければならない。また、翌明宗七年二月に「嘉靖統修会典」の写本を得て宗廟への告祭を決定した(史料M)ことからすれば、官僚への内賜はこの明宗七年二月以後に大々的に行われたのではなからうか。明宗代当時、内賜後三ヶ月以内に製本して承政院に提出するとの不文律(史料F)が了解されておれば、時期的にも蓬左文庫本の内賜記とほぼ符合する。そしてまた、明宗から官僚へのその内賜には「一国莫大之慶」、すなわち宗系改正を朝鮮国王が慶賀する意味を込めていたに相違ない。以上のことから、朝鮮版『正徳大明会典』の印出事業それ自体は明宗七年二月前後にはすでに完了していたものと判断してよからう。

## 五 むすび

これまでに、本稿では朝鮮が明から『正徳大明会典』を購入するに至

った背景、これを朝鮮であらたに印出した事情とその時期、そして朝鮮版『正徳大明会典』の現存本である蓬左文庫本の特性について、実録記事の検討を中心に考察してきた。まずは考察の結果を要約したい。

朝鮮が『正徳大明会典』を購入した背景としては、成均館尊経閣の失火があげられよう。尊経閣は蔵書閣として機能しており、儒教経典類の焼失ははからずとも印刷文化の復興と明からの書籍輸入をうながすこととなった。蔵書の補填を急ぐ王朝政府は定期的に明へ派遣する各種使節に書籍の購入を託し、中宗十三年四月に『正徳大明会典』が朝鮮へもたらされた。これにより宗系弁誣問題が再燃し、のち『正徳大明会典』の印出の際に障害となる。

朝鮮が『正徳大明会典』を印出した事情は、礼制運営との関連が深い。朝鮮は中国の各種制度を摂取しつつ成宗代に『国朝五礼儀』と『経国大典』を相次いで完成させた。礼書としての『国朝五礼儀』がのちの中宗代に校書館より中外に多数頒布されたのは、王朝国家も士庶人も日々大なり小なり儀礼を用いており、その儀礼内容が『国朝五礼儀』に網羅されているからである。ところが、成宗代のいわゆる大典体制の完成後も、礼と法の運用をめぐることはしばしば論議が起きた。礼制にせよ法制にせよ、そのときどきの時代に即した完璧な制度規定はありえない。そこで、礼の運用をめぐる参考とされたのが「時王之制」としての『正徳大明会典』である。王朝政府がより洗練された礼を確立するためには、『国朝五礼儀』の頒布・普及に加えて『正徳大明会典』の印出を必要としたのである。中宗三十一年五月には『正徳大明会典』全巻ではなく、必要な箇所のみに限って抄撰すべきとする論議があったが、その必要な箇所

とは礼制関係の部分であった。

そもそも、朝鮮では『正徳大明会典』の全巻を印出できない事情があった。『正徳大明会典』明祖訓条の「朝鮮国」以下にある三十九文字の註記、つまり宗系弁誣問題である。中宗十三年十一月には『正徳大明会典』の印出が取り沙汰されるが、承政院はこの条文を私意に削除すべきではないとの判断から印出の不可を上啓し、もちろん中宗もこれを承諾した。というのも、当時は宗系改正をめぐる明側と交渉の最中にあり、明皇帝による改正の勅書を得ないまま『正徳大明会典』を印出すれば、同書明祖訓条の記載内容を朝鮮側が認めたことになる。この明祖訓条は朝鮮国王と王室のみの問題ではなく、朝鮮王朝を開創した太祖李成桂と、そして何より朝鮮王朝の成立そのものに關わる問題である。歴代の朝鮮国王はこれまで宗系改正を繰り返し明側に要請しており、『正徳大明会典』全巻の印出は従来の対明外交政策を放棄することにもつながる。そのため、礼制運営上から『正徳大明会典』の需要はあっても、明版のまま印出することは不可能であった。そこで、朝鮮側では明宗六年五月、『正徳大明会典』の印出に際して「朝鮮国」以下の註記を削除することと決定した。すでに乙巳士禍の決着と前王の実録編纂完了により、明宗の王権がひとまず安定していたこともその背景にある。折しも翌明宗七年二月には「嘉靖重修会典」の写本がもたらされ、宗系改正が確認された。以上の内的事情と外的事情から、明宗はこの「一国莫大之慶」を慶賀する意味を込めて、明宗七年二月以後に朝鮮版『正徳大明会典』を官僚に内賜したのではなかろうかと考えられる。そして、その一本が名古屋市蓬左文庫に現存する『正徳大明会典』であるとみてよい。

慶賀する意味を込めて、明宗七年二月以後に朝鮮版『正徳大明会典』を官僚に内賜したのではなからうかと考えられる。そして、その一本が名古屋市蓬左文庫に現存する『正徳大明会典』であるとみてよい。

蓬左文庫本『正徳大明会典』には内賜記があり、そこに記された受賜者「前工曹参議南應龍」と出納者「右承旨臣洪」について検討することにより、刊年の推定を裏付ける材料とした。実録中の人事記録から、南應龍は明宗七年六月十二日の父の死後、工曹参議を辞したと考えられ、一方、出納者の洪曇が同年六月二十二日に右承旨から左承旨に陞進した。これにより、蓬左文庫本の内賜記は明宗七年六月十二日以後、六月二十二日以前の十日のあいだに洪曇によって記された、と判断した。出納者たる洪曇の名もやはり内賜記と実録中の人事記録により特定したものである。頒賜から三ヶ月以内に製本し、承政院に提出するとの不文律から逆算すれば、同本は明宗七年二月以後に頒賜されたものと推測される。同年二月には「嘉靖統修会典」の写本によって宗系改正を確認しており、『正徳大明会典』の内賜は朝鮮国王にとつても差し支えなかったであろう。蓬左文庫本『国朝五礼儀』の出納者「右承旨臣洪」もまた洪曇であったことは、この検討結果の副産物である。蓬左文庫本『正徳大明会典』と『国朝五礼儀』が同じ明宗七年の内賜記を有することは、当該期における両書の需要とその関係を示唆しているよう。

そして、南應龍に内賜されたこの蓬左文庫本には、「朝鮮国」以下にあるべき註記が活字に組まれていない。これはまさしく、明宗六年五月の決定どおりに、朝鮮王室の宗系に関わる註記内容を削除して印出した現存本である。当時は、対明外交交渉が一段落した時期にあたり、その

一方で王政府は統治理念である儒教政治の徹底と教化政策をはかっていた。そのために、『正徳大明会典』の印出に際しては「朝鮮国」以下の註記を削除するほかなかったのである。朝鮮明宗代における『正徳大明会典』の印出は、当時の対内的事情と対外的事情が交錯したなかで実現したものであった。

朝鮮版『正徳大明会典』は韓国内でも五本の現存が確認されている。しかしながら、いずれも零本であり、いまのところ蓬左文庫本が唯一の完本ではないかとみられる。それゆえに、蓬左文庫本『正徳大明会典』は朝鮮の印刷文化史研究において貴重な一書として資するところ大であろう。筆者の問題意識から、朝鮮前期の対明交渉史を伏線として朝鮮版『正徳大明会典』の成立事情とその特性を考察したが、全一八〇巻におよぶ朝鮮版と明版を逐一詳細に比較分析すれば、またあらたな問題点が生ずる可能性もあろう。

以下、いくつかの課題を記すことで今後の展望に代えたい。

まず第一に、宗系弁誣問題の顛末については従来、必ずしも実証的に検討されてはおらず、したがって、前近代の東アジア国際秩序を取り扱った論考においてもほとんど言及されていない。<sup>(N)</sup>しかし、この問題は朝鮮前期における対明外交姿勢、王朝国家観、ひいては王権のあり方を考えるうえで格好の材料となりうる。

たとえば、宣祖二十一年（一五八八）五月に謝恩使俞泓と書状官洪運が『萬曆重修会典』一冊と勅書を得て帰国した際の実録記事をみてみよう。

○上出慕華館迎勅、以權停礼受賀、(中略)上於聞見事件、見馬主事詩、命館閣詞臣和進、仍備忘曰、萬曆戊子(宣祖二十一年、筆者註)春、謝恩使俞泓回到山海關、主事馬維銘贈送以詩、俞泓遂和二首、夫俞泓之是行也、間関萬里、殫盡一心、手捧綸音、親網寶典、變禽獸之域、為礼義之邦、是吾東方再造、箕疇復叙之日也、(後略)(『宣祖実録』卷二二、二十一年五月甲申(二日)条)

P上以宗系改正莫大之慶、親行告祭于宗廟、遣官行祭于社稷及永寧殿、祭畢、御齋殿、伝曰、猥以寡昧忝守丕基、治国無能不克負荷、更無顔面可見祖宗、幸賴朝廷諸賢協力盡忠、天地祖宗默佑陰臨、皇帝神聖明並日月、二百年至痛極冤快雪無余、使海東數千里夷狄禽獸之類、始變為冠冕佩玉之人、得立於天地之間、今日親奉寶典、祇告太廟、志願畢矣、淚與涕並、(後略)(同書同卷、二十一年五月己丑(七日)条)

右の二史料には、いずれも宗系改正直後の宣祖の心情があらわれている。朝鮮王室の宗系を改正した『萬曆重修会典』の頒賜によって、朝鮮は「禽獸之域」から「礼義之邦」となり(史料O)、朝鮮国王は「夷狄禽獸之類」から「冠冕佩玉之人」となった(史料P)。宗系弁誣問題解の意義はまさにここにある。およそ二〇〇年の歳月を費やして宗系改正を実現させた朝鮮国王にとって、「是れ吾が東方再造、箕疇復た叙するの日也」との表現(史料O)も誇張ではなからう。そして、のちに政府・宗室は国王宣祖に尊号を受けるよう繰り返し啓請するようになり、宣祖は再三にわたる固辞のすえによりやうく尊号加上を受諾する。<sup>(85)</sup>

第二に、宗系弁誣問題は朝鮮後期の光海君八年(一六一六)正月にま

たも再燃することである。<sup>(86)</sup>翌二月の実録記事を次に掲げる。

礼曹啓曰、今此冬至兼陳奏使閔馨男・許筠等、齋來皇勅、昭雪宗系惡名、快卞先王被誣、天語勤懇、皇恩罔極、此実無前莫大之慶、迎勅後告廟陳賀等事、似當次第舉行、敢啓、伝曰、議大臣以啓、(『光海君日記』(鼎足山本)卷一〇〇、八年二月庚午(二十九日)条)

光海君八年の交渉については、わずか一ヶ月たらずでまもなく改正の勅書を得る。しかしながら、当該期の宗系弁誣問題の再燃とその解決は、のちに光海君の尊号加上問題、そして南郊親祭の復活論に関わることになる。<sup>(87)</sup>この問題の解決が「無前莫大之慶」であればこそ、その後の政治におよぼした影響は看過できない。

以上の二点を念頭に置きつつ、別稿を準備したい。

(一九九七年十一月稿了)

# 註

(1) 「時王之制」とは当時の中国の王朝(つまり明)での儀礼の施行を規定した制度や法令であり、それ以前の中国歴代王朝において施行されてきた制度が古制である。この概念定義は、金海榮「朝鮮初期 祀典整備Ⅱ」 2014・古制・Ⅱの参用(『慶尚史学』第一〇輯、晋州、一九九四年十月)二〇三頁、による。

(2) 李範稷「朝鮮初期の 礼学」(同『韓国中世礼思想研究』一五礼書 中心〇三)一潮閣、서울、一九九一年九月。原載は『歴史教育』第四〇輯、서울、一九八六年十二月)一九五〜二〇三頁、韓亨周「朝鮮 世宗代の 古制研究Ⅱ 対峙考察」(『歴史学報』第一三六輯、서울、一九九二年十二月)八五〜九五頁、前掲、金海榮「朝鮮初期 祀典整備Ⅱ」 2014・古制・Ⅱの参用「八〜一四頁」。

(3) 『経国大典』と『大明律』との関係については、さしあたり麻生武亀『李朝法

典考』(朝鮮總督府中枢院、京城、一九三六年二月。復刻は第一書房、一九七七年八月)の第二章第五節「明律の準用」、花村美樹校訂『大明律直解』(朝鮮總督府中枢院、京城、一九三六年三月)巻末附録の解説、参照。

- (4) 宗系弁誣の顛末については、末松保和「麗末鮮初に於ける対明関係」(同『高麗朝史と朝鮮朝史(末松保和朝鮮史著作集5)』吉川弘文館、一九九六年十月。原載は『史学論叢(京城帝国大学文学会論叢第十輯)』第三、岩波書店、一九四一年十一月)の第十二章「宗系弁誣の発端」が太祖三年(一九九四)より太宗三年(二四〇三)を中心に実証的に論じた。そのほか、林泰輔『朝鮮通史』(富山房、一九二二年八月)の第四章第四節「太祖の即位及び其諸政」一七七頁、第八章第一節「明及び野人の関係」二九三〜二九五頁、瀬野馬熊『朝鮮史大系 近世史』(朝鮮史学会、京城、一九二七年八月。復刻は原書房、一九七五年十二月)の第二章第二節「国初の外交」二六頁、第六・七章の第二節「対外関係」九九〜一〇〇・一二二〜一二五頁、震檀学会編／李相伯著『韓国史 近世前期編』(乙酉文化社、서울、一九六二年三月)の第二編第六章第一節「倭乱까지의 対外関係」五八六〜五八八頁、李鉉淳「対明関係」(『한국사 9 양반관료 국가의 성립』国史編纂委員会、서울、一九七四年十二月)三三六頁〜三三八頁、朴元煥「忠祖의 世用」(『한국사 22 조선왕조의 성립과 대외관계』国史編纂委員会、果川、一九九五年九月)三三八頁〜三三九頁など、諸概説書でもすでに言及されている。
- (5) 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』(名古屋市教育委員会、一九七五年三月)四九頁。なお、蓬左文庫本『大明会典』(請求番号は一六八・四)は貴重本のため、マイクロフィルムにより閲覧した。

- (6) 沈喆俊『日本伝存 韓国逸書研究』(一志社、서울、一九八五年十一月)、同『日本訪書志——海外所在韓国古板本調査研究』(韓国精神文化研究院、城南、一

九八八年六月)、同『内賜本版式・古文書套式研究』(一志社、서울、一九九〇年十二月)、同『書誌学의 諸問題』(惠辰書館、서울、一九九五年七月)。

- (7) 藤本幸夫「東京教育大学蔵朝鮮本について」(『朝鮮学報』第八一輯、一九七六年十月)、同「大東急記念文庫蔵朝鮮本について(上)(下)」(『かがみ』第二・二二巻、一九七七年五月・一九七八年五月)、同「広島市立浅野図書館蔵朝鮮本に就いて」(『書誌学』復刊新第二六・二七合輯、一九八一年五月)、同「宗家文庫蔵朝鮮本に就いて——『天和三年目録』と現存本を対照しつつ」(『朝鮮学報』第九九・一〇〇合輯、一九八一年七月)、同「庚午字本『歷代兵要』攷」(『朝鮮学報』第一一九・一二〇合輯、一九八六年七月)、同「朝鮮本の訂正について——『重修政和經史證類備用本草』を中心に」(『朝鮮文化研究』1、一九九四年三月)、同「刻工名による朝鮮刊本の刊年・刊地決定法試論」(『青丘學術論集』第八集、一九九六年三月)、同「朝鮮書誌学の諸問題」(『朝鮮学報』第一六三輯、一九九七年四月)など、ほか多数。

- (8) たとえば、中村榮孝「蓬左文庫本『高麗史節要』」(同『日鮮関係史の研究』下、吉川弘文館、一九六九年十二月。原載は朝鮮史編修会解説『高麗史節要補刊(朝鮮史料叢刊第十八)』朝鮮總督府、京城、一九三八年三月)、長正統「湖陰雜稿と鄭士龍」(『史淵』第一二輯、九州大学文学部、一九七五年三月)などがある。

- (9) 『大明会典』の編纂経緯については、浅井虎夫『支那二於ケル法典編纂ノ沿革(法律学経済学研究叢書第七冊)』(京都法学会、一九二一年七月)三二七〜三四六頁、山根幸夫解題『正徳大明会典』第三冊(汲古書院、一九八九年六月)五七二〜五七四頁、参照。

- (10) 『増補文献備考』(純宗二年(一九〇八)巻二四二、芸文考一、歴代書籍条に、宣祖三二年、使臣尹根寿回自明、明帝賜大明会典一部、会典即明太祖洪武年

間所纂典礼也、(後略)

とあり、辛良善『조선조가치』(訓安、서울、一九九六年三月)はこれを典拠に『大明会典』とは明太祖の洪武年間(一三六八～一三九八)に編纂された礼典」と説明して宗系弁誣問題に言及する(三一～三二頁)が、誤解を招く。また、前掲、朴元燾『명조의 官制』では『皇明祖訓』と『大明会典』との関係、その編纂と性格はおろか、中宗十三年の再燃と宣祖二十一年の重修版獲得を取り上げるのみで、その間の対明交渉に関する記述を欠く。新版にもかかわらず、旧版の『한글서』の記述内容(前掲、李鉉淳「対明関係」)から、むしろ後退している。ここに一節を設けて整理する所以である。

(11) 『皇明祖訓』の編纂とその意義については、石原道博『皇明祖訓』の成立(『清水博士追悼記念 明代史論叢』大安、一九六二年六月)、川越康博『皇明祖訓』編纂考 ―とくに『祖訓録』との関係について(『中央大学アジア史研究』第七号、一九八三年三月)がある。なお、本稿では山根幸夫解題『皇明制書』下巻(古典研究会、一九六七年四月)所収の『皇明祖訓』(内閣文庫蔵)をテキストとした。

(12) 洪武帝のいわゆる「不征之国」については、石原道博「日明交渉の開始と不征国日本の成立 ―明代の日本観(一)―」(『茨城大学文学部紀要 人文科学』第四号、一九五四年三月)二〇～二二頁、同「日明通交貿易をめぐる日本観 ―明代の日本観(二)―」(『同』第五号、一九五五年三月)一四～一七頁、中村榮孝「明太祖の祖訓に見える対外関係条文」(同『日鮮関係史の研究』中、吉川弘文館、一九六九年八月。原載は同「明太祖家法に見える侵略戦争抑制の規定 ―祖訓録」と『皇明祖訓』の対外関係条文』『朝鮮学報』第四八輯、一九六八年七月)六六～六九頁、参照。

(13) 『太宗実録』巻七、四年三月戊辰(二十七日)・四月己卯(九日)条。前掲、末松保和「麗末鮮初に於ける対明関係」二四〇～二四三頁、参照。

(14) 前掲、末松保和「麗末鮮初に於ける対明関係」は、中宗十三年四月以降の宗系弁誣の顛末を朝鮮史編修会編『朝鮮史』第四編第七～九巻(朝鮮総督府、京城、一九三六年三月～三十七年三月。復刻は東京大学出版会、一九八六年十二月)から摘記するにとどまる。もちろん、本稿もその恩恵を受けてはいるが、中宗代以降の対明交渉については朝鮮使節が残した各種『朝天録』のほか、明側の史料と対照しつつ再検討する余地があろう。

(15) 『正徳大明会典』は『景印 文淵閣四庫全書』第六一七冊(台湾商務印書館、台北、一九八三年六月)にも収録されるが、本稿では初刊本に近いと推定される、前掲、山根幸夫解題『正徳大明会典』全三冊をテキストとした。

(16) 『中宗実録』巻三三、十三年五月壬子(十四日)条、同書巻三四、同年七月壬子(十五日)条。

(17) 『宣祖実録』巻二二、二十一年三月辛亥(二十八日)・四月丁丑(二十二日)条、『宣祖修正実録』巻二二、二十一年二月条。また、『明神宗実録』巻一九五、萬曆十六年二月丙寅(十三日)条。

(18) 『宣祖修正実録』巻二四、二十三年八月条。

(19) 『萬曆重修会典』の普及版としては、『大明会典』全五冊(新文豊出版公司、台北、一九七七年七月)、『大明会典(元明史料叢編第二輯)』全五冊(文海出版社、台北、一九八四年九月)がある。両者は萬曆十五年刊の同版であり、本稿ではこれをテキストとした。

(20) 前掲、末松保和「麗末鮮初に於ける対明関係」二四八頁。

(21) 前掲、山根幸夫解題『正徳大明会典』第三冊、五七九～五八八頁。ただし、大

本文庫本には二本あり（請求番号は総章則―一〇・総章則―一一）、やや大形本で零本十冊の後者については、a bのいずれに分類すべきかを保留されている。

(22) 前掲、註(5)、参照。

(23) 川瀬一馬「駿河御譲本の研究」（同『日本書誌学之研究』大日本雄弁会講談社、一九四三年六月）五七七〜五七九・六一四〜六二九頁、中村栄孝「蓬左文庫の朝鮮典籍―駿府御譲本」（同『朝鮮―風土・民族・伝統』吉川弘文館、一九七一年十月）二四七〜二四八頁、山本祐子「尾張藩『御文庫』について（一）―義直・光友の蔵書を中心に」（『名古屋市博物館研究紀要』第8巻、一九八五年三月）九〜一頁。

(24) 蓬左文庫蔵『御書籍目録』（請求番号は一四八・二三）所収の「御書籍之目録」については、前掲、川瀬一馬「駿河御譲本の研究」六四〇〜六七四頁の「尾州家駿河御譲本書目並に附注」、参照。なお、「六番」とは分譲の際に長櫃に付された番号である。

(25) 中村栄孝「蓬左文庫朝鮮本展観書解説」（『朝鮮学報』第三輯、一九五八年九月）二二四頁。また、『同』第三輯の巻頭に『大明会典』巻首の写真版（図2の下）がある。

(26) 前掲、中村栄孝「蓬左文庫朝鮮本展観書解説」の翻訳に、金思燁「蓬左文庫朝鮮本」（『日本学』第3輯、東国大学校出版部、1984年1月）の「II 解題」（二四一〜二五八頁）があり、この抄録が李俊杰『朝鮮時代 日本と書籍交流研究』（弘益齋、1986年8月）巻末附録の「8. 蓬左文庫所蔵朝鮮刊本目録」（三〇七〜三二四頁）である。

(27) 以下の内賜制度については、中村栄孝「朝鮮の古版印刷」（前掲、同『日鮮関係史の研究』下）五七二〜五七四頁、沈喈俊「韓・漢籍 韓国版の 内賜本版

式」（前掲、同『内賜本版式・古文書套式研究』八〇〜八四頁による。

(28) 『明宗実録』巻一三、七年五月戊戌（十七日）条。

(29) 『国朝文科榜目』（太学社、1988年3月影印）第一、巻六、中宗乙未（三十年）別試榜（二月初三日行、即位三十年慶）条。

(30) 『明宗実録』巻一三、七年六月癸亥（十二日）条、南世健卒伝。

(31) その後、閔箕が工曹参議を拜している（『明宗実録』巻一三、七年七月辛卯（十一日）条。また、兄の應雲も当時、承政院左副承旨であつたが、父の死後、李鐸が左副承旨となる（『明宗実録』巻一三、七年二月丙辰（四日）条、巻一三、七年六月癸酉（二十二日）条）。

(32) 『国朝文科榜目』第一、巻六、中宗己亥（三十四年）別試榜（光化門別試十一月二十四日行）条。

(33) 『明宗実録』巻二二、六年九月丁酉（十二日）条、および巻一三、七年六月癸酉（二十二日）条。

(34) 筆者の調査によれば、同じく蓬左文庫架蔵の『国朝五礼儀』（請求番号は一六七・一四）の内賜記には、「嘉靖三十一年四月 日／内賜行上護軍宋孟環五礼儀一件／命除謝／恩／右承旨臣洪（手決）」とあり、手決は蓬左文庫本『正徳大明会典』のそれと同一である。『国朝五礼儀』の出納者「右承旨臣洪」もまた洪疊であり、内賜時期も同じく明宗七年である。

(35) 沈喈俊「蓬左文庫蔵 韓籍・漢籍」（前掲、同『日本訪書志』五〇九〜五一頁）。

(36) 匡郭については前掲、山根幸夫解題『正徳大明会典』第三冊、五八五頁に依拠したが、氏の解題では外寸に関する報告がないため、筆者が計測した（請求番号は七一〜七九九）。



- (37) 前掲、山根幸夫解題『正徳大明会典』第三冊、五八七頁。
- (38) 前掲、沈暁俊「蓬左文庫蔵 韓籍・漢籍」五一〇頁。
- (39) 金斗鍾『韓國古印刷技術史』(探求堂、시월、一九七四年十月)二四二頁、藤本幸夫「校書館推治の件——内訓を中心として」『汲古』第4号、一九八三年十一月)一二頁。
- (40) 韓國精神文化研究院、城南、一九七九年七月、七六頁。同書の記載内容は、大韓民国国会図書館司書局編『韓國古書年表資料』(同図書館、시월、一九六九年八月)一八頁を踏襲する。
- (41) 前掲、金斗鍾『韓國古印刷技術史』一九四頁にも、「大明会典一八〇卷三五冊、明宗七年、日本蓬左文庫」とある。
- (42) 大韓民国国会図書館、시월、一九六八年十二月、一五八頁。凡例によれば、「武屹」は「武屹書齋」の略称であつて檜洲書院を指す。
- (43) 李春熙『朝鮮朝の 教育文庫』 卍한 研究』(景仁文化社、시월、一九八四年三月)の附録I「現存書院蔵書目録」(原載は同編『李朝書院文庫目録』大韓民国国会図書館、시월、一九六九年十二月)二三〇頁。ただし、前掲、『韓國古書総合目録』の残巻数とは一致しない。この二書は横組みであり、アラビア数字(21と27)の誤りかと思われる。
- (44) 前掲、李春熙『朝鮮朝の 教育文庫』 卍한 研究』七二〜七四頁。
- (45) 順に、誠庵文庫博物館編『誠庵文庫典籍目録』(同博物館、시월、一九七五年三月)一六九頁、高麗大学校中央図書館編『貴重圖書目録』(高麗大学校蔵書目録第十五輯)『高麗大学校出版部、시월、一九八〇年四月)四八・七〇頁。
- (46) 大韓民国国立中央図書館編『古書目録』4(同図書館、시월、一九七三年十二月)一八〇七頁。
- (47) 丙子字の鑄造については、金元龍「李氏朝鮮鑄字印刷小史——鑄字所畧 中心〇豆」『郷土시월』第3号、시월、一九五八年十二月)一五五〜一五九頁、韓國図書館学研究会編／日韓文化情報センター日本語版監修『韓國古印刷史』(同出版社、一九七八年五月)九五頁、前掲、金斗鍾『韓國古印刷技術史』一九二〜一九四頁、千惠鳳『韓國典籍印刷史』(汎友社、시월、一九九〇年五月)二八四頁、同『韓國書誌学』(民音社、시월、一九九七年九月改訂版)三三三〜三三七頁、参照。
- (48) 個人所蔵本に千惠鳳氏本がある。千氏は丙子字本の一例として『正徳大明会典』卷一六三の第四丁オモチを前掲、同『韓國典籍印刷史』二八七頁、および同『畧한글서체』 고인쇄』(대한사、시월、一九八九年五月)二六頁に掲載する。さらに、同『한글서체』(汎友社、시월、一九九三年十二月)一〇五頁には同書同巻の第一丁オモチを掲載する。惜しむらくは、それが完本なのか零本なのか、また内賜記の有無についても明らかでない。
- (49) 浜田耕策「解説」末松保和先生と高麗・朝鮮朝史の研究』(前掲、末松保和『高麗朝史と朝鮮朝史』)三六七頁に、その写真版がある。
- (50) 李存熙『朝鮮前期의 対明書冊貿易——輸入面을 中心〇豆』『震檀学报』第五四輯、시월、一九八〇年十月)六一頁。
- (51) 十六世紀の書籍貿易を取り扱った論考に、前掲、李存熙『朝鮮前期의 対明書冊貿易』六六〜七一頁のほか、田川孝三(車文燮訳)「李朝 印刷文化와 日本」『東洋学』第二輯、시월、一九七二年十二月)一六〇〜一六一頁、李元淳「赴京使行의 文化史的意義」(同『朝鮮時代史論集——한글과 卍한(川州)의 만남의 역사』느리하루、시월、一九九三年一月)五四〜五六頁、鄭亨愚『朝鮮朝書籍文化研究』(九美貿易株式会社出版部、시월、一九九五年二月)の第2篇第1章「朝鮮初期의 書籍蒐集 및 그 管理」一一六〜一二六頁、および第3

章「朝鮮前期 書籍蒐集政策 — 中宗時代書中心의 二二七—二二六頁などがある。

(52) すでに『経国大典』には次の如き規定がある。

凡印書冊、別蔵于隆文・隆武樓、又議政府・弘文館・成均館・春秋館・諸道首邑、各蔵一件、(同書卷三、礼典、蔵文書条)

(53) 徐居正の遺稿『四佳文集』(『影印標点 韓国文集叢刊』11、民族文化推進会、1988年12月、所収) 卷一、記、成均館尊經閣記に、

(前略) 是年(成宗六年(一四七五)、筆者註)、左議政韓明澮獻議、請建蔵書閣、上允之、命建閣于明倫堂北、閣既成、賜内蔵五經四書各百件、(中略) 并前本館所儲、無慮数万卷、(後略)

とある。なお、尊經閣の成立およびその蔵書については、前掲、李春熙『朝鮮朝の教育文庫』 卷二、研究「一〇—一六頁、参照。

(54) 『中宗実録』卷二二、九年十二月丁酉(九日) 条。中宗代における朱子性理学関係書籍の刊行と編纂については、金恒洙「十六冊刀士林의 性理学 理解 — 書籍의 刊行・編纂을 중심으로」(『韓國史論』7、서울大学校人文大学国史

学科、1981年12月) 一四七—一五三頁、参照。

(55) 『中宗実録』卷二三、十年十一月甲申(二日) 条。

(56) 時代はやや下るが、校書館の綱紀紊乱とその処分に關しては、前掲、藤本幸夫「校書館推治の件」が『眉巖日記草』の分析を通して論じた。

(57) 『中宗実録』卷三四、十三年七月壬子(十五日) 条。正徳帝の勅書を得るのは翌年三月である(同書卷三五、十四年三月戊申(十五日) 条)。

(58) たとえば、すでに中宗十三年には同知中枢府事金安国が撰集庁を設置して『呂氏郷約諺解』を八道に頒布するよう中宗に上奏した(『中宗実録』卷三二、十三

年四月己巳(一日) 条)。

(59) 中宗三十一年代の撰集庁の設置については、金宇基「朝鮮中宗代 金安老執權期の 制度改編과 그 性格」(『朝鮮史研究』第一輯、大邱、一九九二年三月) 二六—三〇頁、参照。

(60) 中宗十七年十月に、王世子の冠礼は『正徳大明会典』を参考に改訂された。礼曹参判金安老の啓によれば、『朱文公家礼』にならった『国朝五礼儀』は「士大夫之礼」であり、『正徳大明会典』は「帝王之礼」である、というのが改訂の根拠であった(『中宗実録』卷四六、十七年十月甲戌(二日)・丁丑(五日)・戊寅(六日) 条)。

(61) 法典の場合、『経国大典』施行後にも永世の法とするにたえる受教を採録した『大典統録』(成宗二十四年)、『大典後統録』(中宗三十八年(一五四三))が相次いで編纂され、法制上の矛盾はそれなりに解消された。しかしながら、礼典の場合、朝鮮後期の『国朝統五礼儀』の完成(英祖二十年(一七四四))を待たねばならなかった。

(62) 『国朝五礼儀』を修正補完した『国朝統五礼儀』の凡例は、朝鮮における『大明会典』の需要を端的に示す。

一、五礼儀、始編於世宗朝、成書於成宗朝、列聖繼講儀文、漸備、至我肅廟及當宇、曠典綰儀、靡不畢舉有可以垂後來而作儀、則謹遵成命、一倣儀礼之統通解・萬曆之統会典、為統五礼儀、去就修刪皆稟睿裁、

この凡例に「萬曆之統会典」とあるのは『萬曆重修会典』を指す。「正徳之会典」と記されていないのは、重修版を優先したものと考えられる。

(63) 『成宗実録』卷一六一、十四年十二月辛未(十二日) 条。

(64) 『中宗実録』に次の如くある。

- 礼曹啓曰、上自国家下至士庶人、日用大小儀礼、無不備録五礼儀註、當広布中外事、皆習知、果如言者所陳〔引儀邊克精輪対〕、其令校書館多数印出何如、伝曰可、〔同書、卷一六、七年閏五月己丑〔十六日〕条〕
- (65) この点、金宇基氏は金安老の没落によって実現しなかった、と推測する。前掲、金宇基「朝鮮中宗代 金安老執権期」の「制度改編」二、性格」二九頁。
- (66) 『中宗実録』卷九六、三十六年八月庚辰〔二十七日〕条、同書卷九八、三十七年五月丁亥〔七日〕条。また、金安老の遺稿『慕斎集』（前掲、『影印標点 韓国文集叢刊』20、所収）卷九、議、赴京使臣收買書冊印頒議条に、『春秋集解』十二冊以下、印刷普及を要すべき十五種八十八冊の書冊目録がある。しかし、このリストに『正徳大明会典』の書名はない。
- (67) この勅書は、権撥の遺稿『冲斎集』（『影印標点 韓国文集叢刊』19、民族文化推進會、付録、一九八八年十二月、所収）卷七、朝天録の末尾にも記録される。しかし、『明世宗実録』には何ら記録がない。
- (68) 『中宗実録』卷九二、三十五年二月壬申〔九日〕条。なお、権撥家の経済基盤については、宮嶋博史『両班——李朝社会の特権階層』（中公新書、一九九五年八月）五三〜七九頁に詳しい。
- (69) 『中宗実録』卷九二、三十五年二月戊寅〔十五日〕条。
- (70) 『中宗実録』卷九四、三十五年十月己未〔二日〕・辛酉〔三日〕条。『国朝文科榜目』第一、卷六、中宗庚子〔三十五年〕別試榜条によれば、文科では甲科の尹希聖を筆頭に十九人が及第した。
- (71) 『中宗実録』卷九二、三十四年十一月庚子〔七日〕条。
- (72) 権撥に随行した通事李應星は「朝廷多有緊要之事、故会典修録方、且停罷、刊行之期、雖至七八年、猶不得停畢」との件を復命報告せず、のちに発覚して「杖一百、流二千里」の処分を受け、官職を剥奪される（『中宗実録』卷九三、三十五年九月甲寅〔二十六日〕条、同書卷九四、三十五年十月丙寅〔八日〕条）。
- (73) 『明宗実録』卷八、三年十月丁巳〔十六日〕・庚午〔二十九日〕条。
- (74) 中村榮孝「『統武定宝鑑』解説」（前掲、同『日鮮関係史の研究』中。原載は朝鮮史編修会解説『統武定宝鑑（朝鮮史料叢刊第十六）』朝鮮総督府、京城、一九三七年二月）四〇二〜四〇四頁、参照。
- (75) 『明宗実録』卷二、即位年十月戊戌〔九日〕条、同書卷六、二年閏九月壬午〔四日〕条。また、『冲斎集』巻首、冲斎先生年譜、および同書卷八、附録、行状。
- (76) 『明宗実録』卷一〇、五年十月己巳〔九日〕条、同書卷一一、六年三月戊申〔二十日〕条。末松保和「李朝実録考略」（同『朝鮮史と史料（末松保和朝鮮史著作集6）』吉川弘文館、一九九七年一月）三三七〜三三九頁。
- (77) 『明宗実録』卷一一、六年六月壬午〔二十五日〕条。二ヶ月後の明宗六年八月に僉知中枢府事韓料を冬至使として派遣するが、宗系改正の奏請を託してはいない（『明宗実録』卷一二、六年八月戊辰〔十三日〕条）。
- (78) 『明宗実録』卷一三、七年二月庚申〔八日〕条。「庚子年例」とは、中宗三十五年の権撥による宗系改正を指す。
- (79) さらに明宗は宗系改正を慶賀して中宗の尊号加上と中外の頒赦、百官の加資をも試みた。しかし、沈連源以下大臣の簽議では、重修版『大明会典』の頒賜を待つべしとする意見が大勢をしめ、実現していない（『明宗実録』卷一三、七年二月壬戌〔十日〕条）。
- (80) 史料N中の「朝鮮国」割註内にある「其子李太祖旧諱」の「太祖」は、『明宗実録』編纂時に挿入されたのではなからうかと思われる。
- (81) 『中宗実録』卷六六、二十四年九月庚申〔二十八日〕条、十月戊午〔二十六日〕

条、『明世宗実録』卷一〇四、嘉靖八年八月壬午（十九日）条。聖節使として赴京した柳溥らは嘉靖帝の勅書を得てはいない。しかしながら、『明世宗実録』と明宗七年に購入した「嘉靖統修会典」の写本には柳溥による奏請が詳細に記載されており、のちの『萬曆重修会典』への改正内容に踏襲されたことをみれば、柳溥の宗系改正に対する功績は十分に評価できよう。

(82) 「嘉靖統修会典」は頒布されなかったため、その体裁内容については明らかにしがたい。しかし、趙士秀の復命報告には、

（前略）臣當其内閣開閉之時、厚賂下吏、伝書而來、則序班郭文銓、詳細伝示、乃與先日韓崱膳書者、少無異處、此正実録也、礼部所藏則是乃草稿也、（後略）  
『明宗実録』卷二三、十二年十一月乙卯（六日）条

とある。したがって、朝鮮が購入した「嘉靖統修会典」の写本は『正徳大明会典』以後の事例を編入した「実録」とみてよからう。

(83) 『明宗実録』に次の如くある。

開城府留守韓崱拝辞、仍獻皇明祖訓曰、此冊乃大明高皇帝訓子孫之書、伏願留覽、答曰、此誠可法之書、當備省覽焉、仍賜馬粧一部、（同書卷一三、七年十月乙卯（六日）条）

(84) わずかに高英津氏が壬辰倭乱後の礼制回復を論じる際に十六世紀末の状況を概観しつつ、「宗系および悪名の改正は朝鮮王室の正当性を中国から認められると同時に国内的にも宣祖の立場を大きく強化させた」と述べて宗系弁誣問題に注目した。同『조선증거 에학사상사 — 에의 시행, 에실의 변화, 에학의 성립』

（한길사, 서울, 一九九五年七月）一七四〜一七五頁。

(85) 宗系改正による尊号加上を国王宣祖に要請する記事は、宣祖二十一年五月から同二十二年十二月にかけて『宣祖実録』『宣祖修正実録』に頻出する。国王の度

重なる固辞は常套手段とさえ思えるほどである。宣祖が「正倫立極盛徳洪烈」と尊号を受けたのは宣祖二十三年二月のことである（『宣祖実録』卷二四、二十三年二月癸未（十一日）条、『宣祖修正実録』卷二四、二十三年二月条）。

(86) 『光海君日記』（鼎足山本）には、

冬至使閔馨男・許筠在北京、以秘密馳啓、国史・野史皆有本国謬柱之誤、臣等呈下礼曹云々、（所謂国史、即大明会典、光国諸臣所已弁明者、（後略））（同書卷九九、八年正月丁丑（六日）条）

とある。光海君八年の宗系弁誣再燃については、桑野栄治「高麗から李朝初期における円丘壇祭祀の受容と変容——祈雨祭としての機能を中心に」（『朝鮮学報』第一六一輯、一九九六年十月）三九〜四〇頁の脚註24で触れた。さらに英祖代には、朝鮮王室の宗系が『皇明通紀』（陳建、嘉靖三十四（一五五五）年）に転載されていたことが発覚する。黄元九「清代七種書所載 朝鮮記事の弁正」（同『東亞史論攷』해안, 서울, 一九九五年五月。原載は『震檀学報』第三〇輯、四四頁、一九八二年三月）一〇五〜一〇七頁。

(87) 光海君八年の尊号問題の帰趨については、平木實氏が王位継承問題に焦点をあてつつ論じた。同「朝鮮後期における圓丘壇祭祀について（一）」（『朝鮮学報』第一五七輯、一九九五年十月）五〜二一頁。

【付記】本稿を作成するにあたり、名古屋市蓬左文庫・東京大学附属図書館の職員の方々には調査の便宜をはかっていただいた。富山大学の藤本幸夫先生には、九州大学文学部での集中講義（一九八九・九三年度）の機会に多くの教えを授かった。そして、本稿の土台となった卒業論文の指導教官である、故長正統先生に謹んで謝意を表したい。

## The Origin and Present Condition of the Korean Version of the *Zhengde Damin Huidian* : Diplomatic Relations with China during the Early Choson Period

KUWANO Eiji

In the present paper, the author examines the background to Korea's purchase of the *Zhengde Damin Huidian* (正徳大明会典) from Ming China, its reprinting, and the present condition of the version preserved in the 蓬差 Bunko archives in Nagoya, Japan.

During the reign of Emperor 中宗, after a fire destroyed the classics library (尊經閣) of the 成均館, the Choson Dynasty began dispatching emissaries to Ming China on a regular basis to purchase replacement volumes. It was in 1518 that the *Zhengde Damin Huidian* arrived in Korea, and its content gave rise to a diplomatic crisis between the two countries. Already the Choson Dynasty had circulated many copies of the *Kuozhao Wuliyi* (国朝五礼儀), a comprehensive collection of political ritual and decorum; however, in its desire to refine such custom, the dynastic government decided to refer to the *Zhengde Damin Huidian*, the Ming Dynasty's consolidated code of law. What the Koreans found in this code were points unsuited to both the founder of the Choson Dynasty and the way in which it was established. From that time on, successive Emperors continued to request the Ming Dynasty to revise the text, and deleted the Korean version accordingly, thus abandoning conventional diplomatic policy concerning China.

In 1551, the Korean government decided to print its revised version of the *Zhengde Damin Huidian*. Coincidentally, the following year a manuscript of "Jiajing Zhongxiu" was transmitted, confirming revisions in the dynasty's genealogy. The Korean emperor lauded these changes and in a congratulatory gesture presented copies of the *Zhengde Damin Huidian* to members of the bureaucracy. One copy of this Korean version remains today in the 蓬差 Bunko archives, and is the only complete volume known to exist. That is to say, items of diplomatic contention between Korean and China have been left out. The volume contains the presentation date of 1552, and after an examination of the giver and receiver, this dating is proven authentic.

The printing and issue of the *Zhengde Damin Huidian* during the reign of Emperor 明宗 was the result of a clash of both internal and diplomatic circumstances.